

加藤 憲曠（かとう・けんこう）

1、プロフィール

俳人。16 回の挑戦で角川賞を受賞。「薫風」を創刊主宰して多くの俳人を育てるが、さらに青森県俳句懇話会の会長を 27 年務めるなど多くの組織を纏め、青森県の俳壇を牽引した。

<生没>

1920(大正9)年4月30日 ~2016(平成28)年3月25日

<代表作>

『海猫』『羽根砦』『鮫角燈台』『杣宿』など8句集。

<青森との関わり>

3歳より八戸市に居住。県立八戸中学校卒業。戦後、八戸市役所に勤務、健診センター事務局長をもって退職。

2、作家解説

本名一夫。秋田県生まれ。鉱山技師の父の転居で八戸市に移住。県立八戸中学から専修大学に進む。友人に勧められて20歳の頃より作句。内藤鳴雪の高弟で当時東京日日新聞俳壇選者、庄司互全に俳句の手ほどきを受け、後に川村柳月、沢木欣一細見綾子夫妻に師事。昭和17年弘前市の第16部隊に入隊。戦後、樺太から帰り21年「すすきの」を創刊。33年、上村忠郎の「青年俳句」、阿部思水の「北地」と合併して「八戸俳句会・北鈴」となる。風土俳句の雄として全国に名を馳せた「北鈴」の大きな柱として、また幾人も輩出した「角川俳句賞」受賞者として、その存在は大きなものとなってゆく。59年の「北鈴」解散後、「薫風」を創刊主宰。「黒子に徹したい」という謙虚で温厚な人柄で多くの俳人を育てる一方、自身は八戸の文化協会会長を26年間、青森県俳句懇話会会長を27年間務めるなど多くの組織を纏め、青森県全体の俳壇を牽引した。八戸市文化賞、青森県

文化賞、デーリー東北賞、東奥賞などを受賞。平成3年には俳句の功績で勲5等瑞宝章を受章する。

青森や八戸の身辺の風土を詠む、吟行を旨とした句作であった。幾度も同じところに足を運び、「海猫(ごめ)の憲曠」「えんぶりの憲曠」などと言われた。代表句に〈燈台の羽撃つかに見え鳥渡る〉〈みちのくの北へ北へと田水張る〉がある。96歳で亡くなるまで八戸のみならず青森県俳壇隆盛の大きな力となった。句碑は楡引八幡宮の〈石獣の口に虫棲み融雪期〉など4基。八戸駅の名物駅弁「小唄寿司」や種差海岸の名勝「葦毛崎」の命名者でもある。

3、資料紹介

○『鮫角燈台』

図書

1981(昭和56)年10月20日

195mm×135mm

第3句集。北辺の燈台員のきびしい生活と自然に取り組んだ第24回角川俳句賞受賞作「鮫角燈台」を含む昭和46年より55年までの359句を収める。自分の住む土地に愛情を注ぎ、足許を意思的に掘り起こす困難な作業を推し進めた句集と言ってよい。